

徳川みらい学会第3回講演会

「家康公と鷹狩」

静岡文化芸術大学准教授 二本松康宏氏



徳川みらい学会の第3回講演会を8月29日(土)、静岡市民文化会館で開催しました。講師は日本文学・伝承文学を専攻されている静岡文化芸術大学の二本松康宏准教授。家康公がこよなく愛した鷹狩りの目的について、文化と伝承の観点から語っていただきました。

要旨は次のとおりです。

家康公と鷹狩りの誤解

家康公が頻繁に鷹狩りを催したのはなぜでしょうか。これまでは、健康法とか、民情視察が目的だったとか、軍事演習を兼ねていたとか、さまざまな説明がされてきました。しかし、家康公に仕えて戦場を駆け巡った歴戦の武士たちに、わざわざ鷹狩りにかこつけた軍事演習が必要でしょうか。鷹狩りに健康法や民情視察をこじ付けたのは、江戸城の奥で暮らし、不健康で民情にも疎くなった將軍たちの時代です。家康公の鷹狩りには天皇の権威(王権)が関係しています。

日本における鷹狩りの歴史

日本の鷹狩りは6世紀以前に大陸から伝わったと考えられます。当時の古墳からは鷹匠の姿の埴輪が出土しています。

平安時代、鷹狩りは王権の象徴とされてきました。天皇の許可を受けない私的な鷹狩りは厳しく禁じられました。よく誤解されますが、鷹狩りはもともと天皇や公家たちの文化でした。『伊勢物語』には惟喬親王と在原業平が交野(大阪府枚方市・交野市)で狩りをしたことが書かれています。この狩りは、実は鷹狩りです。『源氏物語』でも帝が皇族や公卿殿上人たちを率いて鷹狩りを催す様子が描かれています。鎌倉時代になると、幕府は御家人たちに対して鷹狩りを禁止しています。殺生禁止令として誤解されますが、鷹狩りが侵してはならない天皇の権威だったからです。鎌倉幕府の鷹狩り禁止令は記録に残っているだけで7回も発令されています。ということ、それだけ禁令が徹底されなかったということ

鷹狩りと鶴

す。実際には、鷹狩りは武士たちに広まり、愛好されていました。

鷹狩りでは鶴が最高の獲物とされました。家康公はみずから鷹を放つて鶴を仕留め、鶴の肉は塩漬けにして京都へ運ばれ、天皇に献上されました。鶴の肉はお吸い物にして天皇に献上されます。

鶴は、古語では「田鶴」(たづ)と呼ばれます。稲刈りが終わった田んぼに降り立つて落穂をついばむ姿が印象的だったからでしょう。鶴は稲魂(穀霊)の化身と考えられました。全国に伝わる昔話「鶴の恩返し」や「稲作のはじまり」はそうした伝承を物語っています。稲作をつかさどる天皇の鷹狩りは、穀霊の化身である鶴が遠い国へ飛び去ってしまったまわらないように、鷹を放つてその稲魂を大地にとどめようとした稲作の儀式だったのです。

家康公が鷹狩りで鶴を仕留め、天皇に献上したのは、天皇に代わってこの国を治める者としての強い意思表示だったと考えられます。「帝

はもう鷹狩りをなさらなくてけっこうです。鷹狩りのことも、この国のことも、家康におまかせください」という意思表示です。

駿府・静岡を鷹狩りの都に

2010年には、アラブ首長国連邦、フランス、モンゴルなど11ヶ国の共同申請によって、鷹狩りがユネスコの無形文化遺産に登録されました。2012年にはハンガリーとオーストリアが追加加盟しています。残念ながら日本は未加盟です。しかし、ハヤブサを使うアラブやヨーロッパの伝統的な鷹狩りと比べて、オオタカを本流とする日本の鷹狩りには、世界に類を見ない独自の技や美意識が育まれてきました。日本の鷹狩りがユネスコの無形文化遺産に申請できないのは、二つの理由があります。一つは、分立する鷹狩りの保存会や愛好団体を取りまとめる「旗振り役」がないこと。もう一つは、ユネスコへの追加加盟を後押しして盛り上げる「鷹狩りのまち」がないことです。鷹狩りをこよなく愛した家康公の庇護のもと、駿府には鷹狩りの文化が開きました。駿府は、いわば「鷹狩りの都」でした。いまこそ、静岡はふたたび「鷹狩りのまち」として鷹狩りの文化を再発見し、日本の鷹狩りの伝統と美意識を世界に向けて発信してほしいと期待しています。

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 〈TEL〉284-9660 〈HP〉[徳川みらい学会](#) [検索](#)